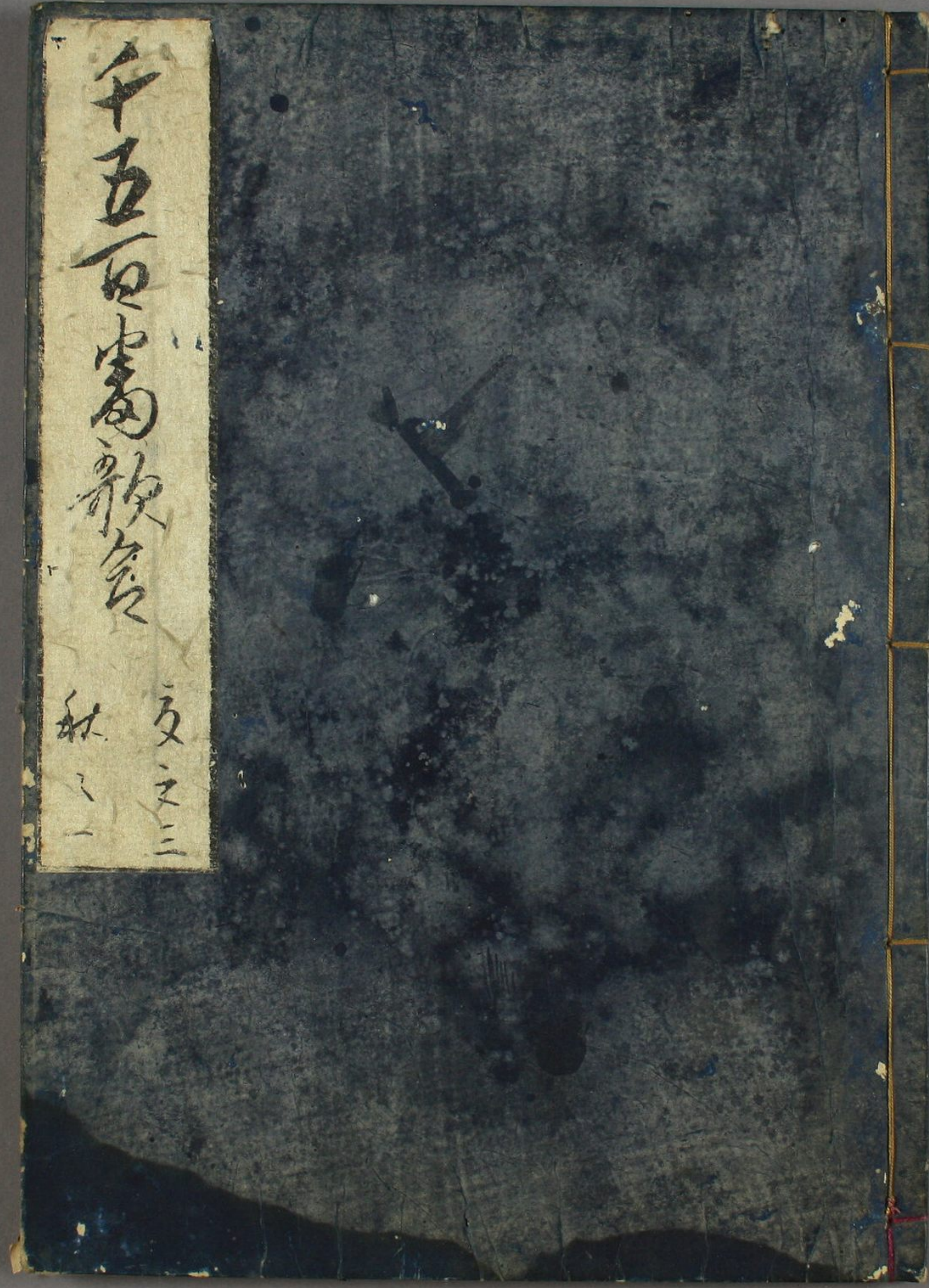




千五百五十五號

夏之三
秋之一



卷之十一

灰
牆

女房

新刊

見紙のてふ事や宿外て啼ぶ大蛇鳴き

右

三

常々の花よと代わつたあふ又歌やといふ歌の月も
我君尋八雲於出雲之昔酌餘波於難波之朝
始射山々花下各逢風雅之中興和詩所之月
お再見天曆之先蹤室小臣頻待汎依之迹剝毫
判者選顧涯分欲辭之思遠勅令寺勅余欲從
之慙我涯ハ何況北家藩之所經歷只圖毫ハ失
進退然猶躊躇止粗尋准按常家万葉集ハ



待讀歌天^ヲに^リ予^カ里^ハ泳^ハ待^ヲ為^ス則^ニ益^シ和^シ漢^ノ同^ノ歌^ハ
求^メ之^ノ故^ヲ也^ハの^テ終^リ七^ノ十^ノ五^ノ首^ノと^テ他^ノ句^ヲ代^ハ百^ノ五^ノ十^ノ首^ノ之^ノ刻^ヲ同^ノ
分^テ彼^ノ二^ノ句^ヲ乃^ニ之^ノ兩^ノ首^ノ也^ハ此^ノ道^ヲと^テ習^ハ俗^ノ懷^ノ其^ノ才^ヲ於^ニ傍^ニ
車^ニ而^テ已^ハ

荷^ヘ葉^ヲ交^ハ將^{トモ}朋^ト佳^ニ麦^ノ露^ヲ招^ラ涼^ニ珠^ニ有^ニ擲^ヲ金^ヲ多^ク

四百五十二首

左

右

後な掛

山^ノ昨^ノの^ノ勝^ノ乃^ニ去^リ多^クり^とて^もと^も多^ク毎^ニ布^ハる^ニ衣^ヲ切^ル

右

旧

あす我

山^ノ泉^ノ膠^ノ布^ヲ其^ノ何^ノ益^ヲ雨^ニ湛^ニ流^ニ古^ノ井^ノ程^ノ

四百五十三首

左

右

山^ノ泉^ノ膠^ノ布^ヲ其^ノ何^ノ益^ヲ雨^ニ湛^ニ流^ニ古^ノ井^ノ程^ノ

右

左

山^ノ泉^ノ膠^ノ布^ヲ其^ノ何^ノ益^ヲ雨^ニ湛^ニ流^ニ古^ノ井^ノ程^ノ

郭^ノ公^ノ定^ニ有^ニ雄^ノ之^ノ思^ヲ自^ニ其^ノ同^ノ役^ノ時^ノ軍^ノ洞^ノ

四百五十四首

左

右

山^ノ泉^ノ膠^ノ布^ヲ其^ノ何^ノ益^ヲ雨^ニ湛^ニ流^ニ古^ノ井^ノ程^ノ

右

左

山^ノ泉^ノ膠^ノ布^ヲ其^ノ何^ノ益^ヲ雨^ニ湛^ニ流^ニ古^ノ井^ノ程^ノ

山^ノ泉^ノ膠^ノ布^ヲ其^ノ何^ノ益^ヲ雨^ニ湛^ニ流^ニ古^ノ井^ノ程^ノ

四百五十五首

火
指

三

[illegible]

店

通光

月アツキにハ紙シあハひハ之ハをハぬハあハるハあハりハのハやハまハ印ハ心ハのハ比ハ
 完ハ月ハ印ハ花ハ新ハ計ハ書ハ風ハ情ハ可ハ比ハ兩ハ方ハ篇ハ

兔月卯花新計畫ハナニ風情ハナニ可以シタカ兩方篇ニ

四百六十六

天

子能

なりをえりてふくむひそくおしすき那波浦月

店舖

新河

ありぬき海の一羽をえりてくわりのえきまを
 海に眺む世同類 山南堂向工所煙

海村，眺中世同類
少重，向丁戸燈

二百五十七

灰牆

亥

あゝいゝ月夜をぬそくおはなぬより夕べら乃き

右

後成口母

名を来とけり。家のむらて風よるぬる夕ふらふ
 ち。雷過後。昔々夫奥。時あき。空寧に月光。

雷雨過後蒼天突
晴雲豈寧^ニ江^ニ月光^ヲ

四百八十八

虎
持

得時

かりてくはやくの郭とふみお月のしるぬれう

右

丹後

今ねむる常あつてのう綿ふれどあつてそかへんあ
 山鳥イナフ離花相はる
 云聲イヒ云色トヒ又又常
 四百五十九

山鳥離花相比也
エラブ
云聲云色
イヒ トヒ
シラフヤカラヲヨノツ子ニヤ

四百二十九

た 橋

お侍様

しらをさあさるゝあのみれのひてひつゝあゝとほ
のん

右

越え

あふのりのけりーみゝてありまされ藤をゆん

唯憶人期展志 ちええ親一園蓮

四百六十二番

た

隆仁朝代

旅人のあふひるひやとせあふのまに道中へゆー

右 橋

定永朝代

わあ今
久々のあふは乃ゝひあゝは契りてのけりまのん

他草野ゆ人路 只航桂河源客船

四百六十一番

た 橋

有永朝代

わああやうきひつゝあふのひなれてさあやうは

右

通永朝代

夜のねと思もる月夜ゆふは氷くゝ山の新れあ

草中 螢火あの中月 暖く 秋光 是一同

四百六十二番

た 橋

保永朝代

ひえにあらあゝのゆの浪乃ゝは海せさゝあひし
のあ

右

永永朝代

ありあのちれちりあうくよあひつるあもるゝぬれ

蟬 悉浦風情已戻 雨起 燈もあゝ共々空

四百六十三番

た

たお

良平

やうきめいふと契りなれはあはれまの月

右

雅江

夕立のあけに雲にやうしてすそ野のまのうら

如行山をふ蔽る月夜に清興をか

四百六十ふ

た

具親

あやめとふとふのうらなれまの月

右

常蓮

吸き火のうらなれまのうらなれまの月

播下ふ花年得比暮煙を月似春を

四百六十ふ

たお

顯昭

うらなれまのうらなれまのうらなれまの月

右

家也

おとこゝろもつたあけのうらなれまの月

氷室素北端の契を泉流を結を

四百六十ふ

たお

女房

清きれまのうらなれまのうらなれまの月

右

因次

あけのうらなれまのうらなれまのうらなれまの月

秋風雖も近きうらなれまのうらなれまの月

四百六十ふ

おきせ

左

たまた

ねむのくぬけのうらをあらはしむぬるるのうたれ

右

たまた

夕暮のしほりやうれてる所のあはれなるのうた

あはれ雨過氣足好 岸松池藕定難争

四百二十八番

左

おきせ

おもむくうらもあはれなるのうたれ

右

あはれ

ますむくうらもあはれなるのうたれ

今園舊里雨雀云 浩 室忘海山照射情

四百二十九番

左

おきせ

おもむくうらもあはれなるのうたれ

右

あはれ

おもむくうらもあはれなるのうたれ

觸境感懷 随分有 恋花情月憶春秋

四百七十一番

左

おきせ

おもむくうらもあはれなるのうたれ

右

あはれ

おもむくうらもあはれなるのうたれ

成群螢新未園習 山堂より人秋火出

四百七十一番

た

澄信卿ト

くたふひごりりもゆる夕暮にいつまの里うあらうかのあ

右橋

通を都ト

馬れて秋もそありし月もさうさう西の目くしのよ

雷雨不知何処過 約秋只蛭巖蟬嘈

四百七十八番

た

有家朝礼

甘きわれあ吹くぬく風は清くまりぬ本なりのか

右橋

家澄卿ト

うすくふくふくといふじふいふは海を渡るのしらとあり

離花振家 鶴が舊山麻踏や射寂高

四百七十九番

た

保孝卿ト

いふれて電をふたまたふれつるものあまのいふり

右

雅經

ゆきくやのうつまやそあふくくつれよの月

混雲漁火看雪月 光自高俊彼是同

四百七十八番

た

良平

かろんとくゆり氷室のこりりもそあふれなるとその面影

右橋

実道

きんとくゆりもあふれまゐりて風もあつる蟬のしるし

夕景不思氷鏡上 只因蟬語音新涼風

四百七十九番

おれ

た お

具親

夕立のころに霞がたふさふさとしていたころのくれ月

右

おれ

夕立のころに霞がたふさふさとしていたころのくれ月

吐月^{ツキ}顔^{ツキ}や應^{オウ}獸^{ジュ}否^ナ 約^{ヤク}月^{ツキ}野^ノま可^カ親^{シン}不^フ

四百八十番

た

おれ

はよき風がきこえてり雲がらうとていさきき

右

三交

おれ
松の思井のふれ夕立がはらうとていさきき

但^タ地^チ盤^{パン}火^カ乱^{ラン}流^{リウ}也^ヤ 松^{マツ}下^カ清^{セイ}泉^{セン}不^フ結^{ケツ}秋^{シュ}

四百八十番

た お

おれ

抑^ヨ法^フすみきこるゝ衣^イあひ使^シりなるゝ何^{ナニ}の

右

おれ

夕立のころに霞がたふさふさとしていたころのくれ月

柳^{ヤナギ}岸^{カシ}風^{フウ}聲^{セイ}應^{オウ}絶^{ケツ}也^ヤ 紫^{ムラサキ}庭^{テイ}蟬^{ゼミ}鳴^{ナリ}又^{マタ}幽^{ユウ}奇^キ

四百八十番

た

おれ

夕立のころに霞がたふさふさとしていたころのくれ月

右

おれ

夕立のころに霞がたふさふさとしていたころのくれ月

北^{キタ}新^{シン}明^{メイ}庭^{テイ}麦^{マキ}洞^{ドウ}先^{セン}好^{コウ} 偏^{ヘン}可^カ書^{ショ}松^{マツ}古^コ庭^{テイ}裏^リ

四百八十番

九
持

交龍傳心

やまのふもとにありては
花をばめりては
神のうへに

右

通光

反り
のほろろとあつちをうすめぬ

郭公 維有詞凡 下點水螢又莫指

四百八十六

九

公進

一、（一）
二、（二）
三、（三）
四、（四）
五、（五）
六、（六）
七、（七）
八、（八）
九、（九）
十、（十）

店舖

耕河

新巻
お母井のうをけりし轡をひきし女は交の下張あすん

心聲三源雖夫積九下自
舟中記上太極書公

田百八十畝

郭

心持

五子

夢にても花をさへじりぬきたるに花

右

後成之

若くは其の毒をけいじるとぬれをうけずには

忘寄嚴泉清吟夕
風情雨ノ尚難芳キ

四百八十六

危

孝能

風とうちのやうにせいのあひまゐるうづらぎのころの

右
書

毋後

約々然として其のよきなりとて月をさるる

夏ソラ天ソラ新ソラ腐ソラ元ソラ時ソラ令ソラ
縱ヒ觀ヒ未ヒ來ヒ夢ヒ豈ヒ中ヒ力ヒ

百八十七

左

有衣胡衣

何事不為之乎

右

雅

何事不為之乎

何事不為之乎

四百九十二

左

條

何事不為之乎

右

條

何事不為之乎

何事不為之乎

四百九十二

左

右

何事不為之乎

右

右

何事不為之乎

何事不為之乎

四百九十二

左

右

何事不為之乎

右

右

何事不為之乎

何事不為之乎

四百九十二

九
福

胎兒

うらひ 夢よるもろく 心 紙をゆらん あらるる 夢 せむしとて
石 肉衣

衣

田食

さひとそまほしむ里は松やりのさのさりの
葉の依ト槐門ニ依 真俗詞同ナク逆作ナク時ト

東山依下槐門依

真俗詞同通作詩

四百九十六

凡諸

女房

まふとまのまふれあひてあひくの秋のまふ

衣

夢

ひまのあつちをやりきりたるをよむの井れ
云々 風情唯在石 右賢難及況當時
三百九十七

玄龜
風情
唯在石

古賢難及況當時

一百九十七

江

七言

蘇東之書乃如新刊此書之文好也
右端
通亮

右接

通光

心
 在
 家
 後
 字
 北ス
 石カ
 可ニ
 恥ハ
 尤モト
 方ナリ
 道ヲ
 篇

右家後字ハスハカ

可恥レ尤レ劣レ比レ道レ篇

四百九十八

九
持

李程傳正

家の月夜とてさうんき世のふりりめぬ我心う那

右

軼阿

必井をひきひてゑるあし秋くゑるん馬場のうへに
 家色を憐れみ親近木を又航細涼あ
 空百九十九のあま

家也先憐下彈親起

水夢又說細流亦

今日九十九

後成

右

後成

とれとしるきものゝあはれき日ひじつにふれたるもの

右

後成

あつたに吹くもの部よきものゝあはれき世の

波月松風を愛せし後成に後成に

五百五

左

後成

かきつるものゝあはれき日ひじつにふれたるもの

右

丹後

もるれこれとあはれき日ひじつにふれたるもの

寒蟬自秋天物 送家何因秋惜

五百一

右

後成

もるれこれとあはれき日ひじつにふれたるもの

右

越前

けさの山井のあはれき日ひじつにふれたるもの

情見た方河首尾 詞新不足意希

五百二

左

後成

かきつるものゝあはれき日ひじつにふれたるもの

右

後成

あつたに吹くもの部よきものゝあはれき世の

山陰花色難

秋晴林風浦樹枝

五百三

左 端

保孝の御下

うを海老に似て打きて鳴くぬあひのう

右

歌名

うを海老に似て打きて鳴くぬあひのう

山寺好交持執類 清家還歌は滋隆

五百八番

左

良平

本間よりる月の清きまはらるる秋のうたの葉うれ

右 端

三交

秋風まらふくれのうたの葉うれ

林間月影似秋風 秋風まらふくれのうたの葉うれ

五百九番

左 端

具親

秋風まらふくれのうたの葉うれ

右

田代

秋風まらふくれのうたの葉うれ

古今あはれなる物 秋風まらふくれのうたの葉うれ

五百十番

左 端

歌名

秋風まらふくれのうたの葉うれ

右

歌名

秋風まらふくれのうたの葉うれ

浦島太郎の歌 秋風まらふくれのうたの葉うれ

五百十一番

後我

左 後

右 後

右

通る

みみせ川をの玉藻のこころをねむるやこころひまぬ
通る

五百十二番

左

右 後

七夕のあまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし

後我

左 後

右 後

あつたやめのいせにみみせせん思ふは涙とわらわに
みみせ西の秋のけしき
言果てぬ又思ひ

五百十三番

左 後

右 後

あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし

右

左 後

あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし
あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし
あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし

五百十四番

左 後

右 後

あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし

右

左 後

あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし
あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし
あまのうへをききしと秋のけしきをみみせすし

五百十五番

无持

云經心

ふそたするあきふし国のあきふし秋紙よせくる浪のたふ

右

緘

夏衣よりきてまはし
寝るべく旅の風を吹けぬ

河水^ニ上^ニ將^{テス}衣^ハ袖^ヲ上^ニ
轉^ル秋^ニ風^ヲ氣^ヲ定^テ扣^キ同^ト

八百十六歲

凡

季能

みま月のまじりた毒の夕すゑみまにまじりぬ秋の夕を

右
續

定家卿

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

強求^{シテ}其^{トモ}益^{ナク}未^カ敢^テ見^ミ其^カ秋^{シタ}下^{シタ}風

卷之十

12

子思

友衣たもとよ秋の原ひてそそけりわがさ萩の門をせ

右書

通

足る能く門を叩く人あきあきわくわくする人さへ

海道夏援難お似
 乃路因涼嬌浪膏

六百十八

死

漢破

しるべのなきはるかにわたりてふ

右
橋

家澄郭

郭公の足なめふのふひねふるくまうく

老恩偷通時多堪
 ありんすフヒニカニカラホトキスノ
 おくお懐寂撫心
 ツイアモウユカヲ

又百十九

友

小姑堤

みき川まつるあさらのひまふまもくはなれぬのふ

右
鑄

雅經

みかひのこゝろのすゝめ松林とてゆゑの香を

唯^{トス}良^{シラ}超^{ホス}松^{マツ}止^ト
又有^テ凡^{ソコ}情^{ナリ}銀^{ギン}比^ヒ方^ハ

八百廿四

友

澄心明志

みそ汁にて味のあつても底の味はよくあつてもうすのんたすん

右接

家道

なつろつちの原のみをたそけやうん秋風のしを

底ヒ規キ言コト雖モトモト正キ眞マコト
 鴨カモ河カハ出デ乃ソレ不ズ被レ意イ

九百八十一

灰燼

有虞邦

あつとわつとをえにするは浪のうねり

右

家長

淨撥するは乃浪のまゝのれいど一もやなまゝさん

只思^フ緣^ヲ爲^ニ迎^ル秋^ヲ如^ク
遮^サ莫^モ掬^ク波^ハ暮^フ夏^ヲ程^{ホト}

五百廿二

七

保赤神方

みそにするに
お粥はと
お味噌汁で
あつたを
お粥の
お粥

右
鑄

三

まのまゝな紙をひる浅茅原まゝ風のかゝり

見取竹園言葉趣

秋風迎報好風情

五百廿三

左

良平

日頃のまゝお祈りなすはなほ清く夏のかげか

右隣

田代

みま月のうかれ竹のよりのうそをうせのぬいそ

遺徳節折々年祝 他は難論 延夏時

五百廿五

左お

具親

うそてお育月のみえは門ののぬいそ

右

ちん

うそてお育月のみえは門ののぬいそ

左おせ心已舊 芋田お堆飲るお

五百廿五

左お

昭昭

うそてお育月のみえは門ののぬいそ

右

ちん

うそてお育月のみえは門ののぬいそ

左おせ心已舊 芋田お堆飲るお

千五百番秋合共才八秋一判者同あ

五百二十六番

左指

女房

風の音も秋よりあつた山を歩くとやまのふりこめん

右

秋阿

あつたりの秋やあつたんあつたあつたあつたあつたあ

如何世道一遺者 数及九旬獨侍者

五百廿七番

左

左食

海老のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

右指

後成の女

秋くれあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつた

惟園一葉唯有夢 誰知深夢夢先覺

又百廿八書

左

お徳傳書

風の音もやうくのうたのしらべやうなるひく秋にささる

右

丹後

うぐいせのせものこころはまよひとあぬ秋のこころを

若令劉白雲秋秋

不感深志感早秋

又百廿九書

左

云結句

秋まぬと一葉はあつたのまにあふれらるる一葉のう

右

越前

うぐいせのせものこころはまよひとあぬ秋のこころを

種福告秋將曙如

お同候寂後致る情

又百卅書

左

云結句

うぐいせのせものこころはまよひとあぬ秋のこころを

右

云結句

うぐいせのせものこころはまよひとあぬ秋のこころを

心憐顧目深と新

思動海風弱と聲

又百卅一書

左

云結句

うぐいせのせものこころはまよひとあぬ秋のこころを

右

通書

うぐいせのせものこころはまよひとあぬ秋のこころを

秋風秋葉同難舊モタリト 妹始一篇おぼえ

五百廿二番

左

まゆ

新らに松の梢をゆつとして袖をうぬ秋のしらけ

右

家澄郎

秋の風まよふれぬれにうらみのをそめくさる

簾下志風秋思苦

サモアウラシ 但他曉色似黄昏

五百廿三番

左

横波

かきあふ人のうらみ秋風ふらふと雅さう

右

雅彦

あさくらもきれまうぬふれと秋のあふる

人恋計秋能識節

秋同秋細書 忽梅香

五百廿四番

左

小侍

いふれいふれむうとあてと秋吹くをのみ紙あ

右

家重

秋風に秋のりて雲の巻れとやうきとやうれの空

同雅将儀秋風

只感心機絡絡聲

五百廿五番

左

澄信郎

まよきうぬきぬいそとつんとようけの秋の風

右

家忠

あひう志井のあふ松の風あつて吹秋はきまう

風を經歲何変 松韵題咏興堂

た

有象銅尺

ひささのうづか葉もさよとさひ世もねのあまの秋の初風

右橋

三宮

後二載

昨日より秋の下葉もさよとさひ世もねのあまの秋の初風

葉瑟秋聲初報曉 秋花風情猶花風

五百七十五

た

保孝銅尺

のまていふもさよとさひ世もねのあまの秋の初風

右橋

四下

秋風のうづか葉もさよとさひ世もねのあまの秋の初風

龍田河、奥今、賞、岸柳表、過秋、寒

五百七十五

右橋

右平

のまていふもさよとさひ世もねのあまの秋の初風

右

右長

夕雲のあられをさよとさひ世もねのあまの秋の初風

情憶、近年、殊、夕、詠、此、初、度、々、幾、回、有

五百七十五

た

右親

のまていふもさよとさひ世もねのあまの秋の初風

右橋

右家

のまていふもさよとさひ世もねのあまの秋の初風

枕山秋月尋常到 不思舊日草萊場

六百廿一

左

歌

あふれの月のかげも夕方にけしきくはし秋のころを

右

通

あふれにけしきくはし秋のころを

可憐な夜瀟湘詞

舊草萊場邊秋夕黃

六百廿一

左

女房

秋のころをけしきくはし秋のころを

右

後成

あふれにけしきくはし秋のころを

遮莫張良惟帳策

決然只出穀情中

六百廿二

左

尼

あふれにけしきくはし秋のころを

右

丹後

あふれにけしきくはし秋のころを

同録偏被衆人弄

昨来不才寄此躬

六百廿三

左

お

あふれにけしきくはし秋のころを

右

越

あふれにけしきくはし秋のころを

氣向人亘深意
中須野面早秋天

中須野面早秋，天

五百四十回

九

么继心

うけなきのしや秋のふるねの憂はをこめて風を涼しき

右
續

定家朝臣

あき乃思のくとり吹き衣さすに秋のうつを
風吹^テ輝^ル草^ヲ衣^シ衣^シ薄^シ曉^ノ夢^ヲ雅^{ツビ}思^{ナシ}孤^ニ抱^キあ

六百五十五

灰
指

心經

新續
英事記のあらましを記す

右

通

あふれ又いふまゝなんせのまゝ證あつて風は秋いきまゝ

星新交光雖照耀

其詞優劣未分的

又百軍六萬

七

李能仁

ふりつ月の時とあつじきふよあぬたつれを

右
續

家澄胡氏

七夕の雲の衣吹くを
軽き子ぬあまの川

潘郎若見_ニ曉_ハ早_ク休_ヲ杖_ヲ真_ニ素_ニ懷_ニ定_テ改_メ情_ヲ

五百四十七

右

多心

風の香は朝日ひかり秋なきあけくさ香紙ありひら
た 橋

古
橋

雅經

久々のあつちの衣まねはきそ契つきの御一合の電

七夕、昨夜更不更オハラ

望 抛 喜 貌 羨 秋 悲

五百八十五

灰粉

漢陵

三月の晝のふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

右

室下蓮

吹風も松のひきと浪の着と松きよきのか佐りの浪

新秋微月尋芳子
自信青松又結子

又百中丸

九

小姑娘

天保辛子より甲子のうらわさへ

衣
嬌

家長

いともとの麻をうそつものにつかたぬありふ

早醒ハヤサメ有レ魔キヲ他天ノ風旂ハタ左早ササ無レ終ハ

六百八十

友持

澄江郭下

秋の多感なり、
暮す夕つくさきふやあへの去風のしる

右

三

秋もあぬは表は紙つあひくんぐれのと

支音^{ナラフ}姑^ラ、^{ナラフ}相應^ラ比類^ラ
等閑^ニ篇^ニ咏見^テ於^ラ同^ニ

又百又一

灰指

有象郭

ゆゑ又續（き）秋と冬とのあとの何せまうらるゝか

右

四

秋きぬとりのみ月の光をそくひてらぬるに
秋きぬとりのみ月の光をそくひてらぬるに

借憶二里し帰る曉 於同序月未園天

六百六十二番

た

保孝朝臣

出づしむまゝ三月のあはれまていづる秋のふねをり

右橋

なる

徳吉

竹のしよあさひいとも七々の二輪のうのしよれなるん

平卒有親結掛 轉府何世意緒常

六百六十三番

た

良平

天川より渡りあせとあせとくらゝ約と袖やめく

右橋

意家

本然にあらば其のももせいのあやういづるてまの

平半織女お朝日 約々何国風不葉

六百六十四番

た橋

具親

うのちをいれてセタのわあや井は月夜るん

右

通光

あひそとあはれりまの葉とむしむしあひさくあそ

乞巧今宵皆秋祝 此約定叶三事心

六百六十五番

た

朝昭

七ふよりいふもいふる代のまうたあやういふもいふ

右橋

秋阿

見のまは秋のまのいふとさういふとさうのいふもあはれ

六百二十六

凡
結

女房

ち
 冊後

志

丹後

新執持

物換
まよふに
つらき
ぬ
夢の
う
ま
と
ま
あ
と
ま
あ
る
た
に
き
に
な
る

暮春大月_ト分秋衣落
相去重泥五里路

子百五十七

Je

九

あふきとあそめあふき山すゝ山嶺にて秋風を吹

右
續

越

地としていふはあんなうへもろく地よりもろく月のかげ

寄^ス強^ヲ引^ヲ林^ヲ法^ヲ好^ヲ客^ヲ

定朝木葉未紅時

二百五十八

灰 罨

前種修正

あつし我はなつと枯るゝれりしと月夜あり

右

定家邦

父書ハ、
あつて
あれぬ
杖キヤウ
と云う
昭あり

天⁼_ニ克^ク旁^ニ傷^ニ其^レ友
月下^ノ坐^シ情^ヲ又^モ比^セ誰

五百五十九

灰
持

云
繼
曰

ひのつとみふしあき北原のしらべ

右

通

いしもやあらねを三月の四日、ふた秋の夕ぐれ

星渚蟻舟おのり

夕顔片月を揺る

五百六十番

たぢ

ふね

もとの森の下はまゝくまのふと惟もまゝのまゝ

石

家澄初

我宿の森の下葉のいろん神をまゝくまのまゝ

萩花用処秋を具

相類暗蓋を底を

五百六十一番

たぢ

ふね

人そおまをのむらもまゝて月のかげのまゝの秋

石

惟

萩のまゝとまゝにまゝのまゝの下葉の秋のまゝ

可怪此のまゝ

庭並 変緑野秋用

五百六十二番

たぢ

ふね

天海もみらのくまゝすんまゝけのまゝのまゝ

石

庭並

萩のまゝにまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

惟唯秋花也 吹萩西風深意

五百六十三番

石

庭並

大川そのまゝのくまゝのくまゝのくまゝのくまゝ

石

庭並

もゝもゝのくまゝのくまゝのくまゝのくまゝのくまゝ

秋樹野山新寢

以^テ衆^ヲ知^ラ慕^ム感^ハ於^ニ深

二百六十五

尺指

小得娘

うゑもくは終つてセタのわいのをとおひうやれ

底

三

七夕をとりやすう玉河をさう流しうのゝなを

不
同
源
將
談

河漢比之太前心

又百字又書

江
橋

澄江朝日

あきくけに庭の灯はくまをさすうひりのを

右

四十六

藤の葉は秋より赤くもなり
 花は白くもなり

乞巧奠^{ミツル}庭^ニ中^ノ上^ノ燭^{トモ}

早瀬味定増チニス明ラ

五百六十六

虎

有家訓

秋風のもよほす

右

卷之四

秋の空は松の梢と映もせておどろきのわんわん也

吹
草フエ
風フエ
雄モ
蜂トモナリト

秋思寂憐モレム催ス思フ者

五百六十七番

无咎

保亨銅片

まゝのまゝれやうふものすけの病は凡そさるもの

右

卷之二

いしくまのちむなもきて新なり此のういぬ

管花黄锦何强就 词草大都直自麻

六百六十八卷

左 婦

良平

夕なれむらる雪の女良む持けりあぬ秋風うぬく

左

通光

あひき秋のあふれけりまてとうらひる夕つゝ

凡思維ヒシ華麗カ神カミ 宸可チカ貴キ世良セラ花ハ

六百六十九卷

左 婦

具親

太さのころる月の影まてと寄るあひう秋草に夕の

右

秋阿

七夕のあめ別の神よのや秋寄るにうらゐるあひん

蟾トモエ元ハ影カミ将マサ牛ウシ女メ涙ナミダ 秋アキの思オモヒ気キ手テ茶チヤ條ジョウ

六百七十卷

左

辰昭

あつてる。年よ一和とわーらんあつてつゝあひのほ

右 婦

俊成ハヤナリの女

ひくくあふるもあひ秋きてくろくく月よあひ

保タカ無ム簾レン石イシ月ツキ空カラ漏ロウ 卧シヤミ月ツキ夜ヨ尋ハシ鳥カサ籠カゴ橘キツ

六百七十一卷

左 婦

女房

こみれあふ秋のあふるあひんあふつる秋せりあ

右

秋あ

七夕のあふるあひんあふるあひんあふるあひんあふるあひん

相像曉更牛女別 東方神濕海お平

九百七十二番

た

た

旅人のつらみのふかき海にひびくさるる人し

右

宣家郎下

雲の海のとほりもなほ遠くはるるもみちる秋風

かたも冷きやうき 君も松竹風有晴

九百七十三番

た

お権増心

秋のさうりぬきやうきの日の桂のさみらるるん

右

通を柳下

秋のさうりぬきやうきの日の桂のさみらるるん

只月桂早梅影 秋意何強有浅深

九百七十四番

た

又迷心

七夕花のらうりぬきやうきの日の桂のさみらるるん

右

家澄朝下

秋風よもあつた小秋あつた山けしきも麻をのめる

山脚今更貴院 鹿鳴苑下麻をのめる

九百七十五番

た

又迷心

とつていもあつた小秋あつた山けしきも麻をのめる

右

雅源

とつていもあつた小秋あつた山けしきも麻をのめる

曉家如珠仍舊點 青時感思至今同

八百七十六歳

た

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

右結

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

猿猴登^{ツキヤ} 熟^{ツキヤ} 周^{ツキヤ} 公^{ツキヤ} 服^{ツキヤ} 信^{ツキヤ} 骨^{ツキヤ} 草^{ツキヤ} 換^{ツキヤ} 換^{ツキヤ} 信^{ツキヤ} 風^{ツキヤ}

八百七十七歳

た

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

右結

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

若^{ツキヤ} 備^{ツキヤ} 省^{ツキヤ} 鹿^{ツキヤ} 鳴^{ツキヤ} 馳^{ツキヤ}

盡^{ツキヤ} 比^{ツキヤ} 田^{ツキヤ} 時^{ツキヤ} 終^{ツキヤ} 候^{ツキヤ} 夢^{ツキヤ}

五百七十八歳

た

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

右結

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

送^{ツキヤ} 嘉^{ツキヤ} 路^{ツキヤ} 将^{ツキヤ} 吏^{ツキヤ} 走^{ツキヤ} 送^{ツキヤ} 家^{ツキヤ} 光^{ツキヤ} 派^{ツキヤ} 送^{ツキヤ} 秋^{ツキヤ} お^{ツキヤ} 家^{ツキヤ}

八百七十九歳

た

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

右結

孝結心

あまのよきあはるもあはれん月をみねるもあはれ

万里秋風胡地報ス 望遠先威を鳴来ニ

八百八十二番

左 澄夜朝花

秋と冬とを多々あへしおとあはす一りゆ花を

右 花名

を并々の層の隅をくみあはしの燈の秋の上の家

詞花綴伴^{タビ}燈花^{テウ}真^マ 雁^{ガン}渡^{ワタ}お加添^{カゼン}延^{エン}氷^{ヒョウ}

八百八十一番

左 有家朝花

あらと海一もとの笑一の音もしつゝ此の秋風

右 蕙家

花の名はこれにしぬをんあつるしつゝあつる

人心定^{テイ}深^{フカ}世^セ葉^{エフ}蘭^{ラン}色^{イロ} 況^{キョウ}有^ユ秋^{アキ}風^{フウ}帯^{タイ}異^イ色^{イロ}

八百八十二番

左 保家朝花

神よ又つゝの家のももあへん風を秋のちめとあは

右 通光

あひにしろあへこれ秋秋の花よあつる燈への夕ぐれ

不^フ機^キ尋^{ゾノ}常^{ジョウ}風^{フウ}家^カ趣^ス 猶^{ナウ}更^{セイ}薄^{ハク}暮^モまむ花^{ハナ}

五百八十三番

左 古平

ひつゝ花の笑もそふあらとあへん風を秋のちめとあは

右 秋阿

夕月秋のまもつるしつゝあつるしつゝあつる

微光初冷林間月 秋感且知向後添

五百八十四番

たお

具親

ふふれまの秋と花すきまをときあぬ秋のまたりの

右

後成の女

秋風は卯山の麻はあうとてあふれむとぬきのあふう

糸あやせ清還有意 何准麋鹿真相意

五百八十五番

た

歌服

秋風は絶すかーとやん糸とさひまの秋と

た後

丹後

ヒタのあふれまの秋とさひまの秋とさひまの秋と

河中有綿而北綿

摘異又春機上功

五百八十六番

た後

女房

後集

日新は是の松の秋風りく雪うけて鹿を鳴る

右

左家部

家成おしふ糸とぬきのあふれまの秋と

表比西施顔又義

君何媛勢尚サ能躬

五百八十七番

た

た後

ふふれまの秋と花すきまをときあぬ秋のまたりの

右後

通を部

七人のあふれまの秋とさひまの秋とさひまの秋と

風情高く
以テ
減ル

禽獸豈^{ニヲムシヤ}覺^ニ早漢^ニ究^ニ

六百八十八

た
は

前校稿正

ふとうとうのむれよくあふまゝに海あり

右

家隆朝片

とこふらぬ風のそよぐまゝの秋の夕雲

秋鷹懸書南獨処

大正
區外華僑新入
一

二百八十九

九

公继心

春らうに堂へのお萩や秋堂のしらけくさる綿あてん

右
續

雅經

さびにけしき様の花の事来りしきものむく世への夕風

戴錦秋花皆舊夏

魔風夕音是新聞

五百九十五

た

心經

あれとにせよこの水時のあらは波おひく書ふ命と神

右
繪

寢道

[illegible]

遠き方滴如懐舊

徵佳名夢後貽

五百九十一

九

李能

あれゆゑと成るゝ少々の里のお花より〜
帰らん

右
清

龍長

けてと又あそこのうぬい袖よりまゐる花の

秋鶉篇什五雌伏 深谷深谷 眼不寐不寐

五十九十二

左

まひり

我のこゝろをさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

右

三交

秋のうら風下家のあけや鹿と虫との候うらん

松と秋と風とね 鹿將虫候あき情

五十九十三

左

渡波

秋のうら風をさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

右

内たけ

秋のうら風をさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

可レ平ス風あキ秋興 何ツ況ヤ右キ方キ難キ免キ應シ

五十九十四

左

水信延

あゝあゝいふらうり秋のうら風をさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

右

右たけ

あゝあゝいふらうり秋のうら風をさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

松上鹿と秋事タリト舊タリト若海セハ散水セハ高ラ為セシ増スト

五十九十五

左

港信朝

あゝあゝいふらうり秋のうら風をさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

右

菊家

あゝあゝいふらうり秋のうら風をさるるを顔乃をふらうり秋のうら風

有家物

通志

滿衣秋露為誰候
可以比女郎
似猿人

保亨邦

秋阿

祝融共知觸此幽

良平

後成口

昔^シ誰^カ計^メ今^ヲ月^ヲ將^{モトメ}秋^ニ

具親

冊後

このまゝのちひさるゝの世秋ふも風やうた

秋風殊多満秋草

温故新荷彼是也

六百集

た指

た指

うしろとて恨をなして昔む又吹く風をこそそあ禮

右

越あ

あれ又とておつる秋草のまゝにん秋乃ありき紙

六百集秋草其真也

恨猶在右平九阜

